兵庫教育大学　研究紀要　第22巻　2002年3月　pp.13－21

オノマトペから学ぶもの

On What We Benefit from Onomatopeic Studies

有　働　眞理子*
Mariko UDO

This paper examins various perspectives of previous studies on onomatopeia and discuss the significance and findings we can expect of them. Historically, linguists has long failed to recognise the importance of onomatopeia, due to the wrong idea of the role of sound symbolism in linguistic theory. It is high time, however, that we changed our view on the theoretical status of mimetic expressions, now that cognitive approaches have started to reveal psychological aspects of onomatopeic system.

キーワード：オノマトペ　音象徴　文法　認知発達
Key words：onomatopeia, sound symbolism, grammar, cognitive development

0．はじめに

「口の中でジュワアッと肉汁とともに，とろけるようなやわらかさ（薄切りロース肉）」，「コリコリした食感がたまらない（ホルモン盛り合わせ）」，「フワッとしていて，やや立体的，シンプルなだけに食べ出したら止まらない（チヂミ）」，「旨みを十分に吸った麺はピカッと照りが出るころが食べどき」[1] などの焼肉の解説に，下線部の表現が果たす役割は重要である。これらは，いわゆるオノマトペ（擬音語・擬態語の総称）と呼ばれるカテゴリーであるが，言葉一つで聴覚・触覚・視覚などの五感を刺激しながら，いかに美味しいかについて効果的に味覚に訴えている。オノマトペは，私たちの言語生活において，日常の何気ない会話から文学作品まで多種多様に活用されており，必要欠くべからざる表現形態である。論文等の公文書には顰蹙をかう口語的スタイルであるが，状況描写には臨場感あふれることこのうえない。オムツがとれない頃から「ブーブー」，「ワンワン」と会話し，「どんぶらこっこどんぶらこ」と桃が川を流れてくるのを想像し，ルンルン気分で青春時代を過ごしてきた私たちにとって，オノマトペとは最も身近な存在の言語表現の一つなのである。

しかしながらオノマトペを文法カテゴリーとして見た場合，言語研究の対象としてはやや周辺的な現象として扱われる傾向にあり，研究・調査の進歩も他の文法現象に比べて立ち遅れているようである。一般に，感覚的要素の濃いことばであることから，実際にフォーマリティが低く，また，直観的にいって幼児的であるといったイメージが強いことが響いていると考えられるのであるが，根本的な理由は他にもある。西洋の近代言語学において，ソシュール以来言語の「恣意性」が強調されるあまり，「非恣意性」が過小評価されてしまった歴史的経緯の影響を，ここで再考する必要があると思われる。動物たちの信号などと異なり，形式と伝達内容が直接的な関係にないという特質は，ことばの成り立ちに複雑な内部体系を認め，それを記号によって記述しようとする近代言語学においては研究の基本的な前提となってきた。こういった学問的土壌においては，オノマトペは，実際の音を模倣した，形と意味の間に何某かの対応関係があるもの，即ち「非恣意的」な表現として，これを扱う研究から言語の重要な知見を学ぶ，といった敬意はあまり払われてこなかったのである。

しかしながら近年オノマトペを対象とした研究は，既存の価値観に積極的に疑問を投げかけたり，新しい視点からの切り込みを入れたりしながら，魅力的な研究分野に変身しつつある。具体的には、明示的な音韻分析に基づいて行われる音象徴の意義の見直し、本格的なオノマトペ語彙データベース作成及びそれに基づいた対照言語学的表現論、或いはオノマトペの身体性に着目した認知科学的研究など様々な方向が生まれている。この小論では，オノマトペという言語現象から何を観察し，理解してきたのかについて，いくつかの先行研究を例として取り上げ，オノマトペを観察する視点を理解しながら，そこから私たちが何を学べるのか、特に新しい方向としてどのような研究課題が開けているのかを考えてみたい。

1．文法記述として

1－1　音韻的アプローチ

自然音の模写というオノマトペの最も基本的な出発点を考えれば当然のことであるが，この表現範疇の文法的関心はまず音韻論的な分析に向かう。そもそも音の模写という側面が安易な言語起源論を動機付けたという過

＊兵庫教育大学第２部（言語系教育講座）
平成13年10月22日受理

程が歴史的にある他，先に述べたように，文法としての成り立ちが例外的に非恣意的であるということと併せて，擬音語・擬声語の属性を音韻論から研究する意義は残念ながらあまり深く追求されなかった。Ding Dong theory といった呼び方に象徴されるように，19世紀から20世紀半ばまでは事実上軽視或いは放棄され続ける状況があったようである。オノマトペという表現範疇は単に臨場効果抜群の原始的な音声手段であるといった程度の認識が一般的であった。

オノマトペの文法的位置付けの軽さについては，直接的なオノマトペ語彙の比較的少ない印欧語等を通して観察がなされたことの影響が少なくない。擬態語の場合により顕著であるが，例えば日本語では歩行の様態を表わすのに，‘すたすた’，‘のろのろ’，‘とぼとぼ’，‘てくてく’，‘よちよち’，‘よたよた’，‘しゃなりしゃなり’など，歩く速度や歩く人の年齢層・健康状態，或いは性別といった細かなことまで想像できる手がかりとして，オノマトペが独立機能している。これに対し英語では，‘stride’，‘loiter’，‘trudge’，‘hoof’，‘toddle’，‘waddle’のように，様態的な意味が動詞に語形成上組み込まれるパタンがあり，それによってオノマトペ的語彙の出現が体系的に吸収されている。こういったことが文法全体の枠の中で一貫して行われると，たとえ様態についての意味のあり方を理解していても，規則的な形態・形式として認識されなければ，オノマトペに言語要素としての文法的な位置付けを与えることは難しいであろう。英語話者によるオノマトペの軽視という実態については，彼らにオノマトペへのある種の先入観があることよりも，形式化されていない意味概念を文法要素として意識することの限界があることに配慮すべきである。形態論的な背景に，類像的・非恣意的なあり方が絡んで，印欧語におけるオノマトペの過小評価へつながってしまったのである。

そういった中でも，非恣意性を過小評価することに疑問や懸念を表明するものも出てきている。恣意性の反例を提出するだけでなく，例えばBrown（1970）のように，非恣意性そのものに積極的な意味を見出そうとする姿勢も見られ始めた。彼は，英語・中国語・チェコ語・ヒンズー語という系統の異なる言語に対して，語彙の知識がなくても，美醜・明暗・乾湿等等の対立概念を表わす語彙のペアに対して，音声的な手がかりから反意語の割り当てについて正しく予測する確率が高いという実験を行っている。‘unity of sense’という表現を引用していることからもわかるように，汎言語的な音象徴の存在を主張するものであり，音象徴現象に対する研究的関心の高まりへの契機にもなったと思われる。

オノマトペへの音韻的アプローチを展望するために，ここで音象徴とは何かについて簡単に重要な点を確認しておきたい。音象徴（‘sound symbolism’）は，平たく言えば音と意味の直接的対応関係を意味する。意味は構成素を成す特定の形式に対して成立するものとされている。通常の最小の意味単位は形態素であり、そこから独立形態素としての語，句，文と組み立てられて行く。そもそも，意味が文法形式を通して音声的に表出されるという状況に対して私たちは言語の恣意性を認めてきたわけであり，音声的要素と意味の関係は，例えば語のアクセントパタンや文のイントネーションパタンのように，形態・統語的単位を介して成立することはあるが，極めて間接的なものである。音と形，形と意味のように，情報の依存関係を相互に規定できるような関係ではなく，音声情報と意味情報の優先関係も明確ではない。音象徴は，こういった音と意味の曖昧な関係の中に，珍しくわかりやすい形で成立している対応関係なのである。

具体的には，例えば日本語の場合，カ行やタ行の音が硬い印象を与え，マ行やヤ行が柔らかい印象につながりやすい，といった類の情報である。音象徴を表わす音声単位としては/d/, /m/, /p/ といった音素や，[+high]，[+strident]，[+liquid]などの弁別素性単独或いはそれらの束，モーラ・音節，[gl]，[sq]のような子音のクラスターなど様々な音韻カテゴリーのものがある。それら音声的特徴によって規定された単位が表わす意味については，諸言語に共通の普遍性の高いものと，個別言語に限定して特徴的なものの二通りがあり，それらは，本質的な言語の特質を表した現象と偶発的に発生した現象の違いとして，明確に区別しなければならない。擬音オノマトペの場合は特に，模写的な側面があるために，例えば外国語の語彙として後者タイプのものの意味を理解しようとする時などに，普遍的な音象徴として扱うために意味をとりちがえることが起こりやすいので，注意が必要である。いずれにしても，既存の語彙や臨時に創作される表現群に，生産的に関わっている要素であるので，それらを特定し，その上で特定された音象徴についての規則の関係を把握することが重要である。

オノマトペと音象徴についての包括的な研究は，日本語や韓国語などオノマトペ表現の豊富な言語を中心に行われてきており，英語との対照研究も含めて近年積極的に展開されている。本格的に取り上げた代表的な研究としてはHamano（1998），田守・スコウラップ（1999）などがある。前者においては，意味的要素をもつ日本語の音象徴単位が特定され，それらの特徴についてかなり体系的に詳しく記述されている。後者においては，一段階進めて，日本語・英語の比較を通して音象徴上の両者の共通点を探りながら，言語形式として一般性の高いオノマトペ的属性とはどのようなものであるかなどについて，より多角的に考察している。音象徴的意味の例は数多くあるが，それらを網羅的に紹介することは難しいの

で，ここでは目立ったものを特に取り上げて研究成果の質を確認しておきたい。

Hamanoは，弁別素性及び音素を軸に音象徴の具体的項目を挙げる。例えば第一モーラ位置に現れる/i/，/o/，/u/，/a/，/e/の五つの母音について。/i/は音声的には硬口蓋わたり音との連続性のため甲高い音（例.キーキー）を表わす。視覚的には直線的なイメージのものとされるが，一般性は必ずしも高くないようである。/a/は平面的な関わり（例.パンパン）や平べったさ，広がり等を示すもの，/o/は円唇性が示唆する丸さ（例.コロコロ）や量・程度の少なさ（例.チョコチョコ）を，/u/は鼻の穴やすぼめた口元などに関わるもの（例.クンクン・ツンツン），そして/e/が下品さ（例.ゲラゲラ）や不適切さなどの否定的な意味の含みが強い，といった指摘をしている。いずれも母音のイメージとしてはやや特殊な設定であり，該当するものも多いが該当しない項目もかなりの数にのぼると思われる特徴づけである。

子音についても同様に，語頭位置に現れる場合に，例えば破裂音/p/，/b/が緊張状態（例.びんびん）や突発性，爆発的な衝撃，攻撃的・積極的な動作などに関連するとする。/t/，/d/は打撃を，/k/，/g/のペアは軟口蓋咽頭音に関わる音（例.コンコン）や硬い表面との接触を表わす音（例.キンコンカン）を表わすというような情報が非常に詳しく，かつ多岐にわたって述べられているが，‘トロトロ’，‘ドードー’，‘キコキコ’‘グーグー’など，必ずしもこのイメージにあてはまらないものも少なくない。他にも例えば，/s/，/z/の摩擦音ペアが，滑らかや軽い接触・摩擦，静けさ・穏やかさ，さらにはこざっぱりと整理された・冷静なといった人の性格まで表わすとされているが，‘象徴’と呼ぶには雑多なものをひとくくりにしすぎている感があり，丁寧に細分化するあまりに一般性を失うおそれがあるように思われる。/m/についても，はっきりしない状態（例.もやもや）や，落ち着きや理性の無さ（例.ムカムカ）を表わすという記述になっているが，今一つ意味概念としてまとまりを持った表現とは言えない。

全般に，音素を中心に規定しようとすると，規定が事例にあてはまるかどうかという点において不完全になりやすく，言葉で意味を説明する印象論的なスタイルの文法記述にならざるをえないようである。歯切れの良い，客観的な記述を音象徴に求めるのは無理なのであろうか。音象徴の記述の道具立てを検討することは今後とも継続されるべきであろう。また，各音素には複数の弁別素性が束ねられているということにも留意すべきである。弁別素性の相互作用や環境的素因を，音象徴が成立する条件の変数として考慮しなければならないので，音象徴のあり方については，音素単独の属性として固定的に考えるのではなく，もう少し複雑なからくりに左右される変動的な存在として，音象徴を考える必要もあるのではないかと思われる。

次に，日本語オノマトペの語彙的まとまりを表わす音韻形態については，泉（1976）で既にコンパクトに国語学的なまとめが示されているが，Hamano（1998），田守（1993），田守・スコウラップ（1999）などによって，音韻構造をより明示的・体系的に表示した形でまとめられている。これらはいずれも，語基を形成するモーラの内部構造パタンを類型的に整理しており，一音節からなる語基のものと二音節からなる語基のものとの二つに分けて説明している。情報整理すると次のようになる。

一音節のものとしては，CV（例. ふ（と）），CVQ（例. ピッ），CVN（例. ドン），CViVi[2]（例.モー），CViViQ（例.ギーッ），CViViN（例.カーン）というパタンのリストが挙げられるが，これらは一般化してCVi（Vi）（Q/N）のように構造化できる。この中で最初のCV型は幾分古風な響きを持つかなり有標なものとして数も極僅かであり，これを除いたパタンが通常は一般的である。また，それらはCVQ－CVQ（例.クックッ），CVN－CVN（例.ペンペン），CViVi－CViVi（例.ミーミー）のように反復形をとることも多い。母音が長音化されたものについては短母音のものの異形態と見ることもできるので，意味の単位として弁別する際には，その点に留意する必要がある。

二音節のもののリストはヴァラエティ豊かで，子音や母音の組み合わせも様々である。CiVCjV（例.そよ（と）），CVCVQ（例.ブスッ），CiVCjV+ri[3]（例.ニヤリ），CVCVN（例.ドボン），CVQCV（例.パッパ），CVNCV（例.ざんぶ），CiVCjV＋ri（例.ドッキリ），CiVNCjV＋ri（例.はんなり）など多岐にわたる。組み合わせや反復によってさらにいろいろなパタンが可能である。

一音節型及び二音節型のいずれも，基本的に日本語の音節（モーラ）の音韻構造の枠の中で多様性を広げていることがわかる。オノマトペに固有の音韻パタンが存在するわけではない。音韻パタンの可能な組み合わせにより，オノマトペとして可能な音声形式の数は飛躍的に増えることになる。Kakehi, Tamori, and Schourup（1996）には1400頁の大部にわたって，数千のオノマトペ表現のそれぞれに詳しい解説が施されているので，予測されるオノマトペのタイプ数が決して重複を含んだ上げ底でないことを確認するためには，この研究を参照するべきである。

これまでの先行研究において示された形態の型については，よく考えられた定式化であることは確かであるが，必要十分条件を満たすものとして受け止めるべきではないであろう。というのも，上記の型は，既存の語彙に合うパタンを列挙したものに過ぎないからである。即ち，可能なパタンにどのようなものがあるのかというこ

とは述べてあっても，何が可能でないのかということまでは規定されてはいないのである。この記述のままでは定式化が粗すぎて，実際は不可能な形まで含まれてしまう。可能なものだけが保証され，許されない形式が排除されるという過不足ない規則にはなっていないのである。例えば，一音節の反復形CVCVとして，パサパサやパラパラはよいが，*パマパマや*パゲパゲ，*トニトニ，或いは*スジャスジャなどは実際に存在しないのみならず，たまたま存在しないのではなく，そもそも存在が許されない不自然な構成として感じられる，といった直観まで追求し調査されているわけではないということである。観察的妥当性を部分的に満たす資料としての価値は十分であるが，過剰に生成してしまうので記述的妥当性にも不安が残る。まして，オノマトペらしさを規定する形式的特性について，なぜそのような特徴が存在するのかという疑問に答えるために，説明的妥当性を満たした段階には至っていない。[1] これは，人間が言語化できるオノマトペの限界とは何か，自然界にある無数の音声情報や知覚情報の中でどのようなものが人間にとって意味のあるものなのか，という根本的な問題につながるので，かなりの困難を伴う課題になりそうである。しかし，言語としての音と単なる音を分ける境界線について考える重要な問題であるので，この点は今後のこの分野における精力的な調査・研究に期待するところである。

1－2　統語上の位置付け

オノマトペの場合、統語的取り扱いは，音韻的取り扱いに比べてあまり積極的な関心の対象となってはこなかった経緯がある。前に述べたように，西洋近代言語学においては，オノマトペについては音韻分析ですら長い間日の目を見なかったくらいであるから，統語分析の対象として重要であるという認識が育つはずはない。オーソドックスなアプローチとしては，オノマトペ的な表現語彙としてどのような形があるのかを，既存の統語範疇に基づいて整理するという方法がとられるのが一般的である。したがって，オノマトペ的要素を含むものの文中における機能分布によって，副詞・動詞・名詞・形容詞／形容動詞のいずれかに認定され，それら統語範疇として‘完成’するためにどのような形態素を補充することになるのか、といった捉え方になる。

国語学的には，オノマトペは，観念語のうち修飾機能を果たす副用語（副詞）としてのみ位置付けられている（山田（1936））。その中の特に情態副詞という規定になるわけであるが，これは用言の属性を述べるだけでなく，それ自身も属性としての内容を持つ語として機能すると考えられている点，非常に正確な捉え方である。例えば，‘鍋がグラグラ煮立っている’といった場合，オノマトペ‘グラグラ’は煮立ち方の激しさを表わすのみならず，煮立っているときの音声情報を伝える機能も兼ねているということである。音声・知覚情報の付加価値を携えて用言を修飾する，という副詞範疇をオノマトペの統語的基盤と考えるのが妥当であるという立場もあることをここで銘記しておきたい。

オノマトペの統語範疇は一体何になるのかという最も基本的な疑問について考える上で，今述べたような異なる立場があることを前提としながらも，最初に述べた通りに，複数の範疇にわたって出現する語彙・語法パタンを網羅的にまず捉えておきたい。どのような記述になるのであろうか。田守・スコウラップ（1999）では次のように統語上の主要範疇別に項目を整理している。まず，副詞用法を動詞との意味関係に応じて，様態副詞・結果副詞・程度副詞・頻度副詞の4パタンに分ける。様態副詞は動詞の様態や状態を記述する役割を果たすものであり，助詞「と」を義務的に必要とするパタン（例.消しゴムをポンと投げる）と語彙副詞として形式的に独立しているパタン（例.電車がガタンゴトン動き始めた）とがある。ここでは十分な例示が与えられてはいるが，助詞の有無を決定付ける音韻的条件のような制約については，特に言及されていない。結果副詞には，形態的な規定が与えられており，具体的には「に」を伴った２モーラの反復形か，CVQCV+ri，またはCVNCV+riの形に限定されるとある。このタイプは修飾される動詞も，状態の変化を引き起こすいわゆる起動動詞と呼ばれるものに限定され，このタイプの動詞と副詞の組み合わせは日本語の結果構文として機能する。「靴をピカピカに磨く」，「フンワリ（と）焼き上げたホットケーキ」は一例である。程度副詞は，状態変化も含めて状態的な意味を持つ動詞を修飾して，その程度を限定する副詞である。このタイプは事例が少なく，また，音韻形態もCVQ/NCV+ri，或いはCVCVまたはCVNの反復形に限られるという。「白髪がめっきり増えた」「業績がどんどん伸び始める」などの例がある。頻度副詞は，動詞の物理的な様態・属性に言及するものではなく，動詞で表わされた出来事の時間的なあり方を述べるものであるので，オノマトペとしてはかなり有標である。当然事例も少なく，「下校中ちょいちょい寄り道する」のような例を見ると，このタイプをオノマトペとして認定する境界線を考えさせられる。

次に動詞用法について述べる。直接動詞として機能するオノマトペは存在しないが，これはオノマトペ的要素がもともと動詞の意味を補助・修飾する役割のものであり，動詞範疇そのものとして成立するような特性がないという事実から導かれる当然の帰結である。動詞範疇の一部に組み込まれて，即ち動詞的形態素（サ変動詞／接尾辞）と形態的に結び付いて初めて動詞範疇として行

動できるようになる。「ーする」との組み合わせは最も生産性が高く，様々なオノマトペ語基を伴って‘ドキドキする’，‘ニコニコする’，‘うんざりする’，など枚挙に暇が無い。接尾辞による派生も，‘ムカつく’，‘‘きらめく’，‘にやける’，‘ぐずる’など多数存在する。パタンが多様であるだけ，派生の結果できた動詞 にも統語的性質のばらつきが見られ，‘ワクワクする’‘ザワザワする’などの語は状態性の動詞であるが ‘ゴシゴシする’，‘チューチューする’，‘パクパクする’などは他動詞性の高い動詞として機能する。動詞として，他動性やアスペクトの統語的特徴の広がりができてくる。

動詞と同様に，名詞においても，本質的にはオノマトペそのものが名詞化されるようなあり方の範疇ではないため，そのままの形では名詞として文の成分になることはできない。形式的な補助としての接尾辞を伴って語彙化されなければならない。例えば‘ムカつき’，‘きらめき’のように「ムカつく」，「きらめく」などの派生動詞から更に名詞派生したパタンしかない。田守・スコウラップらは，オノマトペ名詞を，幼児的な色彩の強い限定的な名詞の一タイプとして取り扱っているが，このタイプにはもう少し活発な語形成の実態が絡んでいるように思われる。つまり，実際に存在する「ブーブーが来たよ」や「お皿のヌルヌルを落としておいてね」などの例における名詞句としてのオノマトペは，彼らが説明するような語彙として独立した存在というよりも，むしろ本来名詞表現化されるべき‘乗り物’や‘よごれの物質’が，その属性の一部を切りとって，即ち車の警笛や物質のゲル状態を取り出して，その一部の情報によって車或いは物質全体が指示される，いわばメトニミーのような表現として成り立っていると見るのが適切ではないかと考えられる。オノマトペの登場する名詞表現には，この他「キリキリ舞い」や「ごろ寝」のようにオノマトペ要素と動詞要素を組み合わせたり，「アツアツムード」，「ツルツル頭」のように名詞とオノマトペ要素が結びついたりした複合名詞のタイプがある。

形容詞／形容動詞の場合も，単独ではなく，必ずコピュラ的な接辞を伴って「ぼろぼろだ」のような形をとるか，或いは形容詞そのものと合成されて「ピリ辛い」のような複合語を形成する。

以上のような形態的現象の捉え方は，オノマトペという範疇の構造的側面を捉えているわけではない。動詞範疇の中のオノマトペ的要素，名詞範疇の中のオノマトペ的要素といったように，親範疇である動詞や名詞，形容詞などの語形成の部品の一つという位置付けとして取り扱われている。義務的・随意的要素との組み合わせにしても，‘「と」を伴うオノマトペ’とか‘「に」を伴うオノマトペ’といったように，ボトムアップ的視点が目立つ。これだけでは，語形成パタンのタキソノミー的な分析に終わりかねない。要するに，オノマトペとして一貫性のある概念として認識しながら，統語的には全くバラバラの羅列としての扱いなのである。統語分布パタンの違いを超えて，オノマトペ的な素性を共通に持つより統一的な統語範疇として取り扱うことはできないものであろうか。

オノマトペの統語分析の課題としては，今後オノマトペ要素を含んだものを統一的にオノマトペカテゴリー（Onomatopeic Phrase：‘ＯＰ’）として処理して見るという方向を提案したい。このＯＰは，本質的には副詞的な性格付けのカテゴリーであり，共起要素と補部関係を結びながら，多様な親範疇のタイプの拡張に貢献する。そういったあり方について，文法的主要範疇の表現力拡大・創造的言語活動のを表す側面に重点を置いて洗いなおしてみてはいかがなものであろうか。例えば下位範疇についての考え方をHudson（1985）流に柔軟に考えて，言語外的な要素を多分に含むオノマトペなども統語範疇の成立要件のメンバーとして認めてみることも一手である。

Hudsonは，引用動詞 *go* が通常の下位範疇の記述では，表現成立の要件を規定しきれないという実態を観察した。例えば‘The car engin went ［brmbrm］, and we were off.’という文で，［　］の中は実際にオノマトペ表現として舌をトリルさせて車のエンジン音を模倣しながら発話する。或いは，‘The boy who had scratched her Rolls Royce went [rude gesture with hand] and ran away.’という文では［　］内の要素は具体的な身振り言語（gesture）である。こういったタイプの表現も，通常の文法記述の枠におさまるものではないが，確かに英語の現実であり，このような破格のパタンにも対応できるように，文法記述には，固定的でなく柔軟なあり方が求められるのである。そいった意味で，思いきってＯＰというものを設定し，それらの統語分布状況，共起制限と統語素性の関係などを形式化しなおして，知識を整理する作業を進めてみることは有効であるかもしれないと考える。そうすれば，統語的な多様性も，文法全体の中で整合性を持ってさらに体系的に把握することが可能であろうし，さらには従来曖昧にされてきたオノマトペの文法的なステイタスも少しずつ見えてくるのではないかと考えられる。

２．認知科学的アプローチ

２－１　言語外知識との関連

前のセクションで導入したＯＰという概念の統語範疇はもし設定するとなると，もっと形式的な規定を整備しなければならないものであるが，オノマトペを何らかの固有の範疇として理解しなおそうという発想は奇異な

ものではなく，実は言語分析に先行して認知科学の分野において先駆的な研究が既に提案されつつある。

Kita（1997）は，Diffloth（1972）のオノマトペ観にならい，オノマトペ語彙と一般語彙の分析レベルを切り離す提案をしている。一般語彙が分析的次元（analytic dimension）に属するものであるのに対して，オノマトペ語彙は感覚，動き，感情などと直接関わる感情・イメージ的次元（afffecto-imagistic dimension）と呼ばれる観念的な世界に属しており，したがって両者はそれぞれ独自の表示のあり方にしたがうとするものである。この二つの次元の設定を正当化するために，彼はいくつかの議論を行っており，それらは必ずしも成功しているとは言いがたいところがあるが，言語外要素を本質的に多く含み，厳密な意味での言語能力の枠内での処理に無理があるオノマトペ的要素を，文文法的言語能力との相互作用を持つ，認知能力全般にアクセスを持つ全く新しい言語カテゴリーとして，思いきって切り離すという提案は斬新である。Kitaの場合は，統語範疇ではなく，意味表示のための異なったレベルとして考えているので，前セクションにおいて筆者が触れたＯＰという統語的に規定されるものとは若干異なるものであるが，このような区分がオノマトペの意味と形式の体系にどのような切り口を与えてくれるのか，今後期待できる課題として注目したい。

２－２　心理的存在としてのオノマトペ

意味論の拡張という意味で言語理論との関わりの強いKitaの分析の他に，オノマトペを，「感覚（感性）あるいは身体のことば」として認知科学的に，より限定的には認知心理学的な視点と方法論で取り上げるというパイオニア的研究が，苧阪編著（1999）に提示されたばかりである。筆者は様々な理由から彼らの研究に大いに注目している。オノマトペは，私たちの感性に基づいて発達した身近で豊かな言語表現であるにも関わらず，その感性や知覚に関する部分に直接メスを入れるような研究は，意外なことにこれまでほとんど行われて来なかった。記憶，知覚，発達，社会文化的な観点から，オノマトペ表現を通して私たち人間の活動，特に感覚・感性・身体のあり方についての特徴を捉えようという動きが遅まきながら始まったのは，大変喜ばしいことである。

オノマトペの感性的側面は，言語学的には意味記述の問題として処理され，知識そのものが認識されるプロセスに関心を払うことは，言語学の守備範囲外のこととして考えられることはこれまでほとんどなかった。認知心理学的には，五感（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚）や心的状態，行動とオノマトペがどのように対応しているかに関心の重点が置かれるため，感覚と言語表現を関係づける認知モデルを捉えようとする。概略としては，感覚を通して入力された感性的情報は，言語表現系という処理系を窓口として，情報を知識伝達及び感性伝達の二つの知識ルートに分けて乗せると想定される。このうち後者が特定の感性フィルターを通ってオノマトペ表現になり，前者が量的・質的な知識を表現する，というような構図である。この区別は先のセクションで述べたKitaの意味論的位置付けの図式に共通するものがある。脳生理学的には，「知識伝達には脳の側頭から前頭にわたって展開する言語情報処理のルートがかかる」が，感性伝達には，「五感の情報が集められ，感情回路を形成する脳の扁桃体，帯状回さらに前頭眼窩皮質などの感性的な価値評価をおこなう感性情報処理のルートと言語情報処理のルートがまさに重なる交叉路にある」という。[5] 要するに，脳生理学的な処理までもが意味的なタイプによって異なるのであるから，認知モデルにその回路の違いが反映されて当然ということであろう。

さらに，五感のオノマトペが心身の状態を表わす擬態語オノマトペに転化することによって成立する語彙も多く存在することから，オノマトペの認知モデルはそういった感覚の相互作用に関する側面も図式化しようとする。これは，感性体験を共有させる共感覚の問題が関わる現象であり，オノマトペが共感覚を介して比喩的にも機能しうることにつながっている。山梨（1988）には五感に関わる表現の一方向的な関係構造が示されているが，共感覚が原感覚を修飾する方向は，触覚から味覚へ，味覚から嗅覚へと一方的であり，逆の修飾関係はほとんどないと指摘されている。論文冒頭の焼肉の例に「コリコリした食感」という表現があったが，この例でも，弾力性即ち触覚で捉えられる感覚が味覚表現へつなげられている。典型的には「やわらかな味」といった表現が挙げられるが，感覚のあり方として，人間にとって何よりも皮膚感覚が最も原始的な存在であり，原始的なものほど言語表現においても支配的な力をもっているということである。オノマトペの属性記述にはこういった分析の視点が欠かせない。

苧阪らは，290人の大学生を対象に，469語のオノマトペ表現を言語刺激として与え，それらから連想することばについてアンケート調査を行った。このデータにより，さらに各オノマトペ刺激語に対する連想基準表，さらに連想反応語に対する刺激語のリストを作成した。この調査からわかることは，それぞれのオノマトペ語彙に感じられる感性的意味素性の内容の特定と，それらの相互関係（同一語彙の中での意味素性の階層関係）といった，関連するオノマトペ表現の‘心理空間’である。例えば，「笑う」という動詞の様態を描写するオノマトペ語彙として，クスクス，クツクツ，ケタケタ，ケラケラ，ゲラゲラ，ヘラヘラ，カラカラ，ニコニコ，ニタニタ，

ニチャニチャ，ニヤニヤなどが挙げられたが，心情的・身体的な度合いや笑いの強さといった尺度によって，主観的な心理空間上にそれらの語彙の位置付けが示される。微妙な意味の差異を明示的な形式によって特定しにくいオノマトペ語彙に対して，意味記述の指針となる心理学的基盤を与えたことになる。特に重要なことは，それぞれのオノマトペ語彙の語学的特徴，特に音韻特徴をてがかりに，音象徴の存在とその内容の一部を，心理学的に実証することが可能になるということである。このことに関しては，彼らの実験の結果，例えば強度に関しては「清音＜破裂音＜破裂音」の序列関係が見られることや，これら三つの音韻特性の主観強度に感覚的加算性といったような要素が機能することなどがわかっている。

この尺度法は，類似するオノマトペ語のカテゴリー内での住み分けを示したいときにも有効であろう。例えば痛覚に関するオノマトペ群（ズキズキ・キリキリ・ヒリヒリ・ガンガン・チクチクなど）を，主観的強度や発生部位（身体部位と皮膚からの深度など）によって位置付ける地図に示せたら，苧阪が述べるように医療現場のコミュニケーションの一助になるかもしれない。このような情報は外国人患者との接触において役に立つであろう。オノマトペ表現は日常生活において必要欠くべからざる表現であるにもかかわらず，外国語としては習得が困難なタイプの語彙だからである。ただ，強弱のように二極分化できない意味，例えば刺すような痛みとか，重い鈍痛など複雑な痛みの質（シクシク，チクチク，キリキリ，ジクジクなどの違い）などに対しては，十分に意味尺度が対応できるかどうか，尺度の精度に関して不安は残る。それぞれの語彙群の特性に応じた尺度法の充実が今後の課題であろう。

連想の他に，記憶との関わりも研究調査の対象となる。オノマトペ表現は，それを含む文の記憶に寄与するかどうか，する場合何故寄与することなるのか，しない場合オノマトペ表現そのものが記憶に対してどのような作用を及ぼすのか（覚えやすいかどうか）というようなことである。オノマトペが本質的にイメージ喚起度の高い表現であることはある程度わかっているが，実験ではさらに，それらが例えば記憶の再生などにどのような形で影響を及ぼすのかなどについても調べている。オノマトペが使用される語彙環境について，連想関係が標準的で特徴があまりないものより，不自然な連想関係の方が奇抜な印象につながって，その結果記憶に残りやすいというようなこともあるらしい。こういった知識は，広告のコピーフレーズの作成技術にも利用できるであろう。もともとイメージ喚起度の強いオノマトペを，記憶に残る非日常的な用い方で出して印象に焼き付けるというわけである。具体的な広告文の分析を通して，逆にオノマトペの感性的特性と記憶の関係についてわかることもあるかもしれない。

苧阪ではさらに，擬音オノマトペと擬態オノマトペの違いにも心理学的な検証を加えようとする。言語学的には，二つのタイプの違いへの認識が言語学的な取り扱いの違いにつながってはいないが，聴覚モードと視覚モードという全く異なる感覚分野の情報に関して，違いから生じる有意な影響や作用がないとは言いきれない。聴覚情報が喚起するイメージと視覚情報が喚起するイメージには違いがあるはずである。なぜならば，言語は音声形式にのっとって表現されているので，聴覚情報と言語の関係と，視覚情報と言語の関係を比べて見れば，当然のことながら前者の方がより直接的だからである。

この点について，彼らは視覚モードである擬態語が非言語的な視覚イメージを喚起させ，それに対して擬音語が言語的表象をより強く喚起させるのではないかという予想を立て，そのことを「意味的プライミング効果」というものの測定を通して実証している。プライムとは先行情報を意味し，意味的プライミング効果とは，「先行情報の処理が，意味的に関連する後続情報（ターゲット）の処理を助け，結果としてその処理時間を短縮すること」，と定義されている。例えば，「おにぎり」という語を見た直後に「梅干」という語を処理する時間は，「おにぎり」の後に「車」という語を提示されたときよりも短くなるという一般的傾向のことである。このことを利用して次の二つの処理課題が実施された。一つは提示された文字列（この場合はオノマトペ語彙）と線画の有意性を判断する（語彙及び事物についての）現実性判断課題，もう一つは提示された線画の示すもののことばを答える作業と与えられた単語をそのまま読む作業を組み合わせた命名課題である。その結果，先行情報として擬音語を用いた場合，記憶表象の言語的成分を強く活性化するため，線画より単語に対するプライミング効果が大きく，先行情報として擬態語を用いた場合，非言語的・視覚的成分を強く活性化するため，単語よりも線画に対するプライミング効果が大きくなることが，現実性判断課題において確認されたということである。

苧阪氏はここで，実験結果についての興味深い解釈に，私たちの注意を喚起している。その結果とは単語の命名課題においてはプライミング効果の有意差が出なかった点である。擬音オノマトペという先行情報が単語も線画も同じくらいの強さで活性化させるのは何故なのか，ということに実はオノマトペと私たちの関わりが絡んでいる。本論の導入部でも言及したことであるが，私たちの誰もが幼児期には，犬のことを「イヌ」ではなく「ワンワン」，車のことを「クルマ」と言わずに「ブーブー」と呼んでコミュニケーションをはかるものである。擬音語自体を事物の名前として使用しながら言語能力を

発達させる，という言語習得のプロセスのいわば名残りとして，擬音語によって単語だけでなく単語の示す事物の視覚的イメージまでも触発されると考えられるのである。

このように，認知科学的アプローチからは，オノマトペが私たちの生活や生命活動に深く関わっているものであることが見えてくる。筆者の専門外の心理学研究の成果を引用し長々と解説してきのは，実はオノマトペ研究の新しい意味付けを認識すべきであるということを主張するためである。それはどういうことかというと，オノマトペの言語としてのあり方そのものと，私たち人間が言語能力を身につけていく習得プロセスの間に，密接な固有の関係を想定するべきではないかということである。感性を内部に深く取り込んだオノマトペという言語知識の内実を明らかにすることによって，知的・感性的発達を遂げながら人間がどのように言語能力を組み立てていくのか，ということについての示唆を与えられる可能性が大いにあり，そのことは追求されるべきである。

苧阪（1999）では，そういった「オノマトペと言語獲得」という新しい研究領域が提案されている。この視点の研究はこれまでのところほとんどみられないが，言語発達研究のデータには当然のことながらオノマトペ表現が豊富に出てくるので，それらを拾い上げた副次資料も有効に援用しながら，新しい実験データをとっていく必要があるであろう。一般に，1歳を過ぎて一語文らしきものが出現するくらいから既にオノマトペも比較的積極的に活用されてくるようである。この時期，水の音など身の回りの音や動きへの関心が出てくると共に擬音語が出現，擬態語は若干遅れて増え始める。データの出現状況については，文の基本形についての関心からやむをえない状況であるが，1歳から3歳くらいまでの時期の言語発達データが多く，文法の基礎ができかける4，5歳以降の資料は少なくなる傾向がある。しかしながら，オノマトペに関しては，知的・感性的能力の長期間にわたる深化・複雑化と対を成して発達するのであるから，一般の文法能力よりは長いスパンで獲得過程を考えるべきであろう。

苧阪自身は5，6歳児と小学3年生，及び大学生の三段階を設定して調査を実施している。具体的には，「わらう」，「いたい」，「ひかり」の3語について，幼児の場合はモデルを示しながら，知っているオノマトペを答えさせるという検査である。幼児の場合は，記憶の一時的な状況に左右されたり，検査作業の理解に混乱があることもあるので，結果判断は難しいが，2モーラ型の典型的なオノマトペ形態の産出が少ないことや，オノマトペ表現の分化があまり見られない，つまり「いたい」に対しては「イタタ」，「わらう」に対しては「ワハハ」というように発声的な反応になることなどがわかっている。小学生もそのような幼児的発声的発話の反応が多いという傾向があるが，2モーラ型のオノマトペ語は確実に増えている。例えば，「わらう」に対しては「ニコニコ」，「ゲラゲラ」，「クスクス」など8タイプのオノマトペ語が集まっている。大学生になるとさすがに表現力と理解力は飛躍的に伸び，「わらう」に対しては「ニタニタ」，「ウフウフ」，「ガハガハ」など個性的なものも含めて15例が示されている。笑いの質も，単純な笑い方の強弱だけでなく，笑っているときの心理状態を示唆する深層的な笑いに対する認識が変わってきていることを反映している。このような実験からどのような成果が期待できるのであろうか。オノマトペ表現の表出状況を発達段階的に調べていけば，現象・感覚の認知がどのレベルで始まり，どのように分化してゆくのかについての手がかりが得られると考えられる。したがって，今後は大人の基準で選ばれ，用意された検査だけでなく，こどもが主体的に，時には創造的に発したオノマトペ表現なども併せて収集できるように，実験・調査方法を検討しながら観察が続けられるべきであろう。

詳しい分析は行われていないが，苧阪氏自身の家族を対象に調査した記録が，同じこどもの2歳7ヶ月時と3歳6ヶ月時のオノマトペ表出リストとして章末に添えられている。資料価値の非常に高い，示唆に富む記録であるが，上述の検査結果よりも判断や解釈には難しいものがある。2歳7ヶ月時で擬音語も擬態語も取り混ぜて50数例あまり，3歳6ヶ月時で何と160近い例が記録されているが，その中身を吟味する十分な理論的基盤が整っているかどうか，甚だ心許無い状況であると言わざるをえない。少なくとも言語学的には，前述したように，基本的なオノマトペ固有の統語範疇の設定も，標準的な文法規則にオノマトペ範疇が下位範疇化された規則の例もない状態である。オノマトペ表現の統語論はかなり立ち遅れているのである。表出された表現のオノマトペ的意味の抽出，形式的特質の分析，与えられた文脈情報から観察される語用論的な能力の展開など，全体的な判断に先だって行わなくてはならない言語学的考察がかなりある。心理学的にも，特定されるべき発達概念を分類・整理するなど，準備すべきことが数多くあると思われる。オノマトペを新たに認知科学的に調べていくために，関連する各分野における基本的取り扱いを見なおす必要がある。

3．結び

この論文では，オノマトペという言語表現を見つめる視点の変化を追いながら，狭い意味では文法カテゴリーとして，広い意味では認知能力の一部としてその特質を観察し記述する方法を展望した。オノマトペは，乳児

の必要欠くべからざるコミュニケーション手段であったり，日常会話の実感あふれるスパイスとなったり，或いは文芸作品を成立させる表現技術として駆使されたりと，私たちの生活の基本から応用まで幅広く活用される言語表現であり，学問上の周辺的な位置付けは不公平である。筧（2001）の冒頭において，「人生は一箱のマッチに似ている。重大に扱ふのは莫迦莫迦しい。重大に扱はなければ危険である」（芥川龍之介「侏儒の言葉」）という引用部分の「人生」を「オノマトペ」に置き換えた，謙虚なオノマトペ観が示されているが，オノマトペは，人生ほどではないにせよ，十分に重大に扱ってしかるべき存在であると強調しておきたい。オノマトペは言葉と感性と世界と人間が交差する領域に存在するものであり，この上なくおもしろいタイプの表現カテゴリーなのである。

註

1 『ステーション』7月号（1988），生活協同組合コープこうべ、‘焼肉と韓国料理’特集より。
2 田守（1993）では単にCVVといった表記のままになっており，VVの部分が長母音であることを保証するためにここでは同一標識を記した。
3 この型の場合，*パパリ，*ガガリのように，同じ子音が連続するパタンはないので，同一性の回避を保証するために，筆者の判断でこのような表記によって提示した。他も同様である。
4 この疑問に答えるためのヒントとなるような研究としては，村田（1993）があり，意味と形式パタンの相関関係をとらえようとする分析として興味深い。
5 苧阪（2001）参照。

文献

Brown, Roger.（1970）"Phonetic Symbolism in Natural Languages," *Psycholinguistics: Selected Papers by Roger Brown*, Free Press, 258-273.

Diffloth, Gerald.（1972）"Notes on Expressive Meaning," *Papers from the Eighth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 440-448.

Hudson, Richard.(1985)"The Limits of Subcategorization," *Linguistic Analysis*, vol.15 -4, 233-255.

Hamano, Shoko.（1986）*The Sound-Symbolic System of Japanese*, CSLI.

今井むつみ（編著）（2000）『心の生得性』共立出版.

泉邦寿（1976）「擬声語・擬態語の特質」『日本語の語彙と表現』大修館．105 - 151

筧壽雄（1988）「アメリカ英語のオノマトペ－日本語オノマトペとの対比において」『アメリカ言語文化II－アメリカ社会と言語－』（比嘉正範・ニコラス・J・ティール編）日本放送協会

筧壽雄（2001）「“変身”するオノマトペ」『月刊言語』Vol.30-No.9

筧壽雄・田守育啓（編）（1993）『オノマトピア・擬音・擬態語の楽園』勁草書房.

Kakehi, Hisao, Ikuhiro, Tamori, and Lawrence Schourup（eds.）（1996）*Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*（Trends in Linguistics. Documentation 12）. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.

影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房.

Kita, Sotaro.（1997）"Two-dimensional Semantic Analysis of Japanese Mimetics," *Linguistics* 35：379 - 415.

Masataka, Nobuo.（2000）"Information from Speech and Gesture is Integrated When Meanings of New Words are Categorized in Normal Young Children, but not in Children with Williams Syndrome." *Cognitive Studies*, 7（1）, 37 - 51.

村田忠男（1993）「日英語のAB型オノマトペ・重複形・等位構造表現の関係」『オノマトピア・擬音・擬態語の楽園』（筧壽雄・田守育啓編）勁草書房101-125.

苧阪直行（1999）『感性のことばを研究する』新曜社.

苧阪直行（2001）「ことばと感覚—擬音語・擬態語からみるクオリアの探求」『月刊言語』vol.30-No.9

田守育啓・ローレンス・スコウラップ（1999）『オノマトペ－形態と意味－』くろしお出版.

山梨正明（1988）『比喩と理解』東京大学出版会.

山田孝雄（1936）『日本文法概論』宝文館.